

あなたも参加しませんか?
地元出演者募集!
(稽古は当日のみ)
問い合わせ/070-5072-1502 (有馬)

アンデルセン 『絵のない絵本ともうひとつの物語』 セレナード

平成27年度文化庁
劇場・音楽堂等活性化事業

脚本／椎名春子
演出／山本健翔
製作／釘崎康治

とんとんとんと金のくぎ
よねくら・よもやま・まさかね

作 宮沢ゆうま

海流座

〒164-0002
東京都中野区上高田
4-25-2-203
TEL 090-7175-6454
FAX 03-3319-7115

協力 劇団希望舞台
照明OP 高橋 康孝
演出助手 米田 亘
舞台監督 渡辺 良治
文芸協力 坂元 紳一
音響 大地 巖
衣装 岡田 里奈
装置 幡野 寛
音楽 川本 哲勉
照明 松島 勉

（スタッフ）

公演地のみなさん
（協力出演）

（キャスト）
鴨川てんし
工藤 剛
永野 和宏
小笠原 游大
山村 有二
順 みつき
有馬 理恵
藤島 琴弥
たかしたみか

2015年9月16日(水) 開演19:00 (開場18:30)
9月17日(木) 開演14:00 (開場13:30)

川崎市アートセンター アルテリオ小劇場
(小田急線・新百合ヶ丘駅北口徒歩3分) 川崎市麻生区万福寺6-7-1

料金

一般前売 3,000円 (当日3,500円)
中学生以下 2,000円 (当日2,500円)
障がい者 全席自由

主催／お問い合わせ ●090-7175-6454 (制作) ●070-5072-1502 (有馬)
●川崎市アートセンター 044-955-0107 (受付窓口 9:00~19:30 第2月曜日休館)

アンデルセン

「絵のない絵本ともうひとつの物語」

セレナード

作者のことば



ハンス・クリスチャン・アンデルセン

はじめ子どもに晴れ着を買ってやれた「親」が、いま息をつめ、見守っている……

新しい服などには無縁だった「子」が、いま顔中を輝かせ、袖を通して……

乱暴な言い方をすれば、これが「アンデルセンの童話」。国境線を超えて、人の心を静かに潤してゆく、普遍的な共通語ではないかしら。だから読み継がれる。

晴れ着を着た子どもは「わんちゃん、わたしだつてわかるかなあ？」と笑顔を振りまく。でも、もしかしたら親は「子どもにしてやれる最初で最後のこと」と、胸に涙あふれさせているかも知れない、と考えてみる。アンデルセンは日本語の「童話」という概念からほど遠い過酷な現実をためらうことなく描写してみせる。でも、大人も子どももその現実

に生きている。痛み、悲しみ、愛する。これが本当のことであり、読み継がれるもうひとつの理由であろう、と私は思う。

いま、世の光景は、目くるめく色彩の洪水で溢れているのに、なぜか人のこころは恐ろしく乾いていく。私はひたすら潤い

を求めて、「絵のない絵本」を開く。……わたしのこころの絵、あなたのこころの絵……それが見えることを、声が聞こえることを祈りながら。

演出のことば

椎名春子

これまでどれくらい月を見てきたろう。目黒の実家の応接間から見上げ、街灯一つない島根の田舎の間に浮かび、京都の祇園町にばかり、小樽に向かう客船の航跡を照らせば、まだ危険だった頃の深夜のマンハッタンはセントラルパークでの救い、ローマの古代劇場の上では奇跡のように、物音一つしないモンゴルの草原には横たわっていた。

あるいは、女子と歩く夜の道、その見事さに思わず発した

「月」という言葉を「好き」と聞かれて、互いにどきまぎしたことや、人生どうでもよくなつて、やめちゃうおうかつて時の、空から溢れ落ちそうな月に、やめちゃうことをやめちゃったこと、その姿にイメージがあふれ、けっこう自信持って書き上げた赤い月と題した作品が没になったこともありました。

そんなふうに月を見ていた時々の私を、月も見えていた、というふうに思ったら、いろんなことが浮かんできました。

山本健翔

とんとんとんと金のくぎ

よねくら・よもやま・まさかね

作 宮沢ゆうま

斎加年さんが遠くに行ってしまった一年。このいくつもの貌をもつ稀代の天才の晩年は長期の旅の日々でした。

ことに二〇一二年秋は、東京から鍋釜積んで、北海道四二日間の過酷な旅公演でした。

「良い芝居は観客によって完成する」「良い芝居を安い料金で、演劇と無縁の人々に届けたい」との情熱は、舞台はもとよりその人柄、生き方に対し、離島、僻村をふくめ多くの熱心なファンを遺しました。

この度はそんな苦難の直接、間接の見聞をもとに、最晩年、巨匠斎加年さんが、なぜ放浪の詩人アンデルセンにこだわりの、ご自身を託し重ねることになったのか、旅のエピソードを交えながら、まとめました。

北海道の津々浦々とお馴染みの地に
熱情をこめて感謝の心いっぱいにおとどけます
北海道・新潟・川崎・長野 巡演

米倉 斎加年 追悼

70年前の3月10日、東京大空襲の悲劇を誰にも語らず生きてきたあるひとりの女性が、戦争と革命の中で生まれたアンデルセン文学を通して、今、孫娘に伝える愛と平和のメッセージ……
あなたの心に届けたい!

小森陽一(東京大学大学院教授・日本文学者)

